

序 文

第29回エンドメトリオーシス研究会会長
高知大学医学部産科学婦人科学教授

深 谷 孝 夫

平成20年1月に、第29回エンドメトリオーシス研究会を開催させていただきました。伝統ある本会を担当させていただき光栄に存じております。

子宮内膜症の存在は古くから知られており、多くの先駆者が病態の解明と治療の開発に従事して参りました。現時点では、特に薬物療法の新たな展開や内視鏡手術の洗練により、従前と比べれば管理法が向上した可能性があります。しかし、より洗練された手術療法あるいはより効果的な薬物療法をもってしても子宮内膜症を完全に征圧したとは言えません。とくに、近年では子宮内膜症は増加の一途をたどると言われ、少産少子・女性の社会進出という時代には大きな影響を有する疾患の1つであると考えられます。

今日、本疾患に関する病理・病態の基礎的研究や外科・薬物治療の新しい考え方には日進月歩の感があり、ここ数年間でダイナミックに展開されてきました。第29回エンドメトリオーシス研究会におきましても、多くの基礎的な研究に関する演題が発表されました。今までのMeyerやSampsonらの仮説を踏襲しつつも、より分子生物学的あるいは免疫学的な知見に基づいた発症・進展機序の研究が報告されたことは、今後、本疾患の解明という大きな展開に繋がると考えております。

また、今回の研究会におきましては、今までの薬物治療に新たな展開が報告されたと存じます。すなわち、新しい薬剤の登場であります。その1つは、新しく合成された黄体ホルモン製剤の登場で、Gn-RHアナログ製剤とともに新たな黄体ホルモン製剤が使用できることは、治療の選択肢を広げるものであります。さらに、薬剤としては新しい存在ではありませんが、経口避妊薬に関するRCTがわが国より報告され、子宮内膜症性疼痛管理への将来の応用が期待されます。

最後になりますが、高知という遠隔地にもかかわらずご参加いただいた多くの先生方、研究会関係各位に感謝いたします。特に、熊本大学片瀨秀隆教授には「子宮内膜症の謎」の解明に大きな光明を照らしていただきましたこと、主催者として心より御礼申し上げる次第です。

わが国における子宮内膜症の基礎的・臨床的研究がさらに発展することを祈り、ご挨拶とさせていただきます。